

5 地方名調査結果

(1) ホタル類 (コウチュウ目)

① ホタル類 (総称) (ホタル科)

ア 対象種

ゲンジボタル、ヘイケボタル等

イ 生息情報

全集落

ウ 採録した呼び名

- ・ 総称 ヒカリボタル、ホタル、ホータル、ホータルサン、ホータロ、ホータロー、ホータロサン、ホッター、ホッターサン、ホッターロ、ホッターロー、ホッターロサン
- ・ 梅雨時期 セツボタル、セツボータル、ツユボタル、ヤマイボタル、ヤマイボータル
- ・ 生息場所 川辺・水辺：カワボタル、ミズボタル 田んぼ：タンポボタル
藪：ヤブボタル 草藁：クサボタル



エ 生息及び呼び名の状況

夜に尾部を発光させながら飛翔等する甲虫であり、梅雨時期の前から初夏にかけて身近な小川や水田等で仄かな光を灯す姿が見かけられる。当時はゲンジボタルとヘイケボタルが郡内全集落に生息したほか、ヒメボタルも一部に生息したようである。

本類総称としては、「ホータル」や「ホッター」をはじめ計12種を採録した。

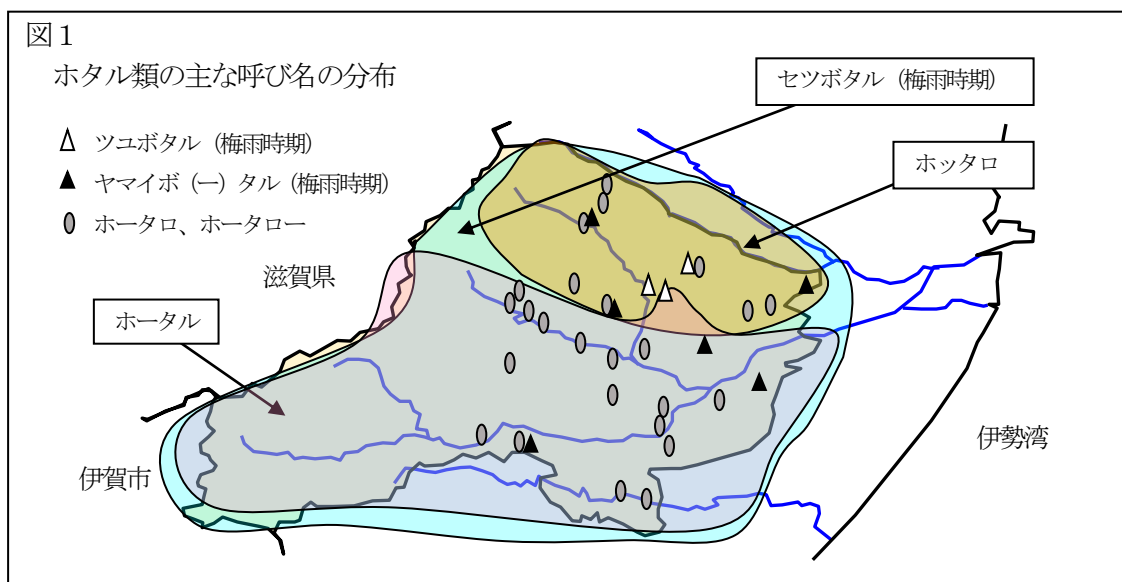
郡内では大きく二つの呼び名の地域に分かれ、御幣川から内部川流域にかけての郡北部地域では「ホッター」、安楽川及び鈴鹿川本流域以南の広い地域で「ホータル」と呼ばれたほか、両区域にわたって多くの集落で「ホータロ」もみられた。

出現時期からは、梅雨時期では「セツボタル」や「ツユボタル」をはじめ計5種を採録したほか、生息場所からは、川辺・水辺にいる「カワボタル」と「ミズボタル」、集落又は人によっては田んぼの「タンポボタル」、藪の「ヤブボタル」、また草藁の「クサボタル」も使われた。

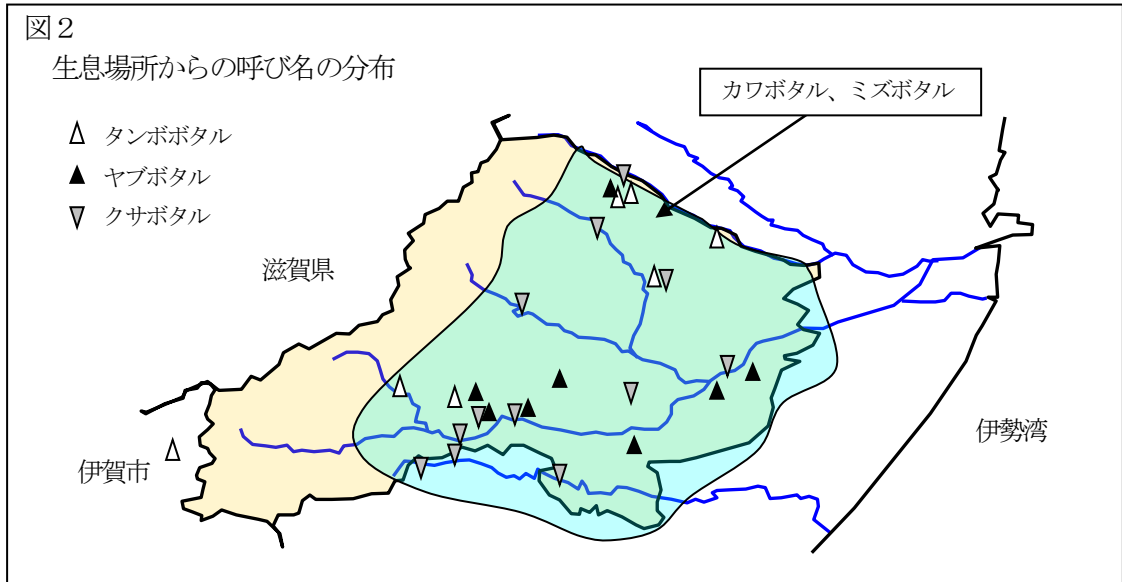
オ その他

聴き取りから、併せてホタル狩りの唄を採録するとともに、昔はとても多く発生したようで、菜種がらや笹、団扇であおって捕ったり、蚊帳の中で飛ばした、という話が多くみられた。

また、カイコ養殖のネズミ除けにホタルを捕ってカイコ棚に入れた、という話のほか、「ホタルが家に入ってくると雨が近い」という諺・伝承等を採録した。

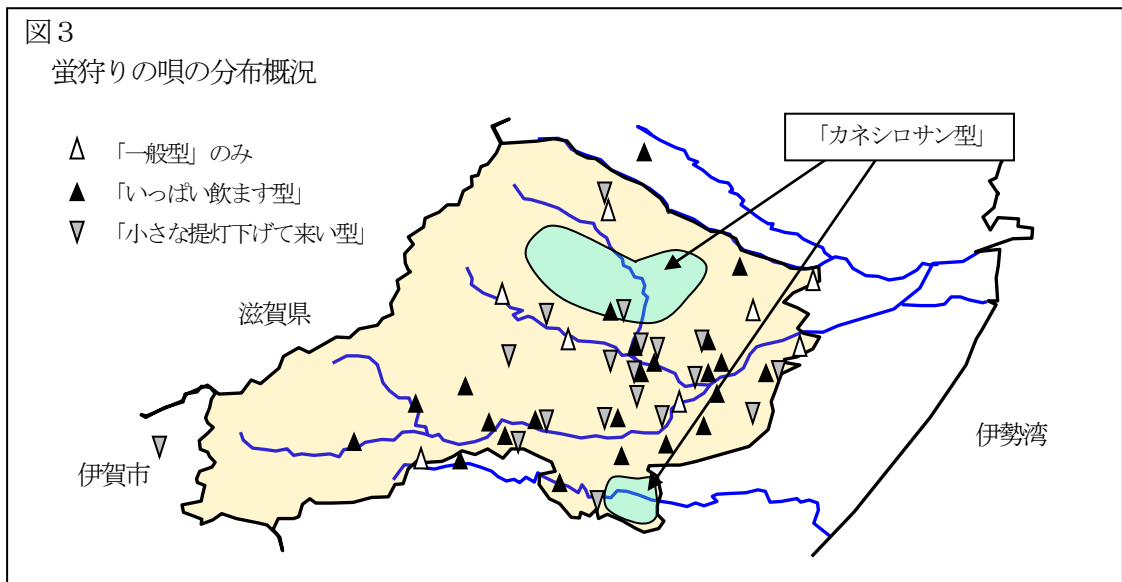


※ 生息場所からの呼び名については、郡内のほぼ全域から「カワボタル」や「ミズボタル」を採録したほか、一部の集落で「タンポボタル」や「ヤブボタル」、「クサボタル」がみられた。



※ 蛍狩りの唄については、全集落で調査をしていないが、郡内では、学校教育で一般化したようである「一般型」を含め、大きく区分し4種、細かく区分すると計15種の唄を採録した。

庄内・深伊沢地区と昼生地区において「カネシロサン型」を採録したほか、郡外の津市大里町や鈴鹿市神戸とともに郡内で広く「いっぱい飲ます型」と「小さな提灯下げて来い型」がみられたことから、ほぼ全域でその両型が古くから唄われたものと考えられる。



※ 凡例

- ・ 「一般型」：「ほーほーホータル来い、あっちの水はにーがいぞ、こっちの水はあーまいぞ、ほーほーホータル来い」
- ・ 「カネシロサン型」：「ホッタロサン（又は ホータロサン）、カネシロサン、あっちの水はにーがいぞ、こっちの水はあーいぞ（又は うーまいぞ）、いっぱい飲ますにじょうもてこい」（又は、これに類するもの）
- ・ 「いっぱい飲ます型」：「ほーほーホータル来い、あっちの水はにーがいぞ、こっちの水はあーまいぞ、いっぱい飲ますに飛ーんて来い（又は 杓もてこい）」（又は、これに類するもの）
- ・ 「小さな提灯下げて来い型」：「ほーほーホータル来い、小さな提灯下げて来い、あっちの水はにーがいぞ、こっちの水はあーまいぞ、ほーほーホータル来い」（又は、これに類するもの）

② ゲンジボタル (ホタル科)

ア 対象種

ゲンジボタル

イ 生息情報

全集落

ウ 採録した呼び名

- ・ 大型であること ウシボタル、ウシボータル、ダンゴボタル、ボタンボタル
- ・ 明るいこと カンベボタル
- ・ 生息場所 カワボタル
- ・ 標準和名等 ゲンジボタル、ゲンジボータル
- ・ その他 イチボタル、ミヤボタル



エ 生息及び呼び名の状況

梅雨時期前の比較的早い時期の夜に小川等の水辺で仄かな光を灯し飛翔等する大型のホタルであり、ヘイケボタルに比べ集落間で生息状況に差がみられるものの当時は郡内全集落に生息したようである。現在は山辺を中心に限られた地域でのみ見かけられる。

本種の呼び名としては、「ウシボタル」や「カンベボタル」をはじめ計10種を採録した。

郡内全域で標準和名である「ゲンジボタル」と呼ばれたほか、同様にほぼ全域でヘイケボタルに比べ大型であることから「ウシボタル」とも呼ばれた。

地域的には、関町近辺で「ミヤボタル」、深伊沢地区で「ボタンボタル」と呼ばれ、また椿地区から郡東部地域にかけての集落では当時の明るい町であった神戸（鈴鹿市）に例えた「カンベボタル」がみられた。その他、鈴鹿川沿いを中心に一部の集落では「ダンゴボタル」、鈴鹿市平田・弓削・岡田では腹部（内側）の白い一筋から「イチボタル」とも呼ばれた。

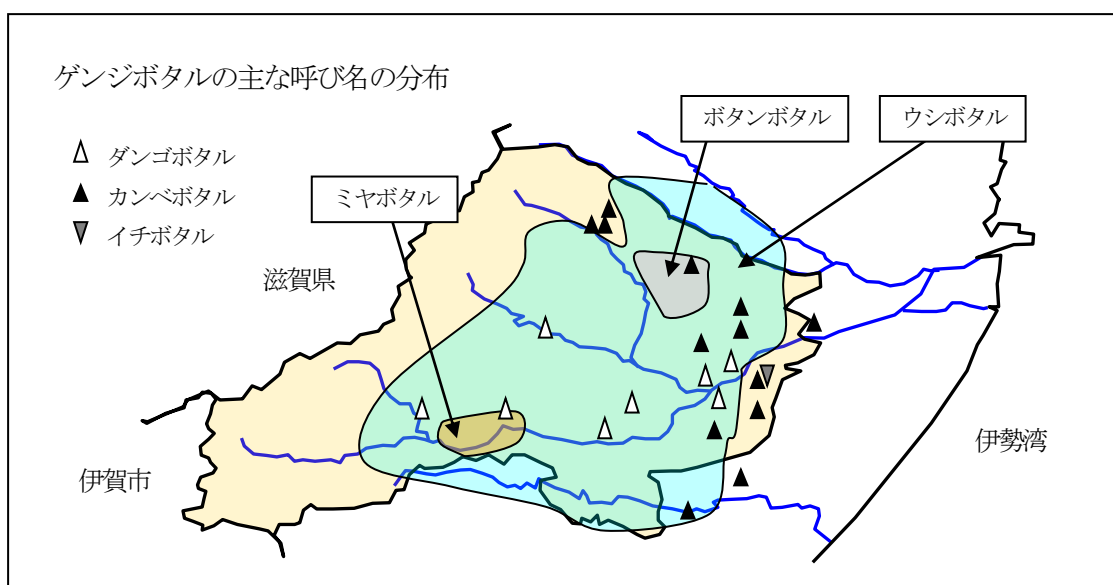
一方、ほぼ全域で採録した生息場所からの呼び名である「カワボタル」は多くの集落で川辺にいるホタル類を指すようで、本種であるという説明があったのは数集落に限られた。

なお、隣接地域として調査を行った四日市市水沢町では「ボタンボタル」を採録した。

オ その他

聞き取りから、次の諺・伝承等を採録した。

- ・ 「ゲンジボタルを家に入れると火事になる」
- ・ 「ゲンジボタルを見ると目がつぶれる」



③ ヘイケボタル (ホタル科)

ア 対象種

ヘイケボタル

イ 生息情報

全集落

ウ 採録した呼び名

- ・ 小型であること コゴメボタル、コメボタル
- ・ 梅雨時期 セツボタル、セツボータル、ツユボタル、ヤマイボタル、ヤマイボータル
- ・ 生息場所 川辺・水辺：カワボタル、ミズボタル 田んぼ：タンポボタル 藪：ヤブボタル 草藪：クサボタル
- ・ 標準和名等 ヘーケボタル、ヘーケホータル
- ・ その他 ビンボーボタル、ミヤボタル



エ 生息及び呼び名の状況

梅雨時期を中心とした初夏の夜に身近な小川や水田等で仄かな光を灯し飛翔等する小型のホタルであり、当時は郡内全集落に生息したようである。農業等で一時期ほとんど姿を消したが、下水道の整備進展に伴う川の水質の改善等により現在は比較的広い範囲で見かけられる。

本種の呼び名としては、「コメボタル」や「タンポボタル」をはじめ計16種を採録した。

郡内全域で「ヘーケボタル」と呼ばれたほか、一部の集落を除き最も多く見かけられたことから、通常は「ホタル」、「ホータル」といったホタル類の一般的な呼び名で呼ばれた。

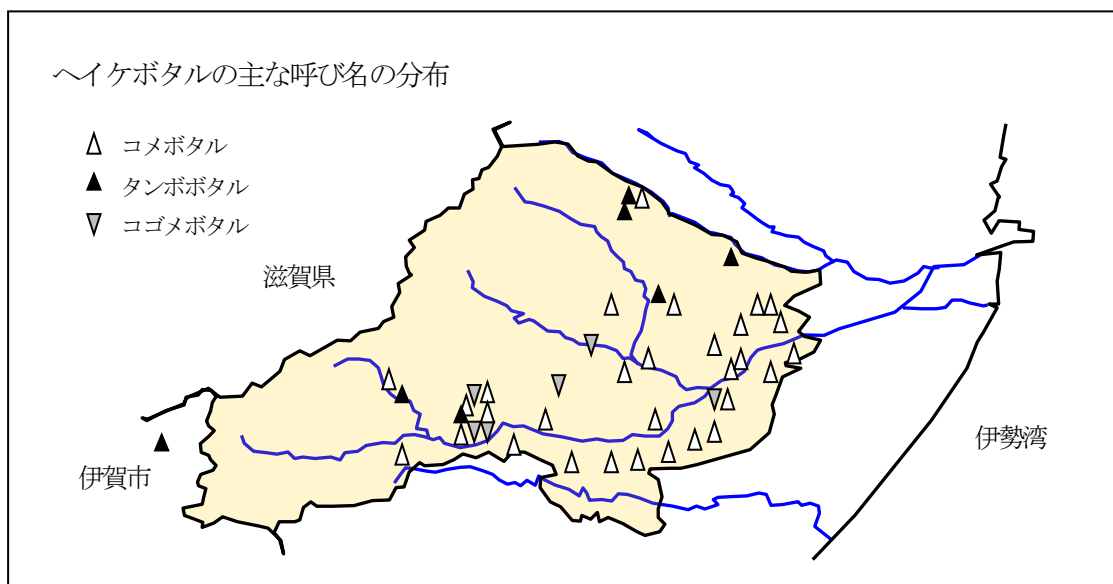
また、ゲンジボタルが「カンベボタル」や「ボタンボタル」等と呼ばれたのに対し、鈴鹿川本流沿いの地域を中心に小型であることから「コメボタル」や「コゴメボタル」と呼ばれた。

一方、①の総称で記述の梅雨時期に飛ぶ「セツボタル」、「ヤマイボタル」等は時期的に本種を指すほか、生息場所からの呼び名として採録した川辺・水辺にいる「カワボタル」や「ミズボタル」、田んぼにいる「タンポボタル」、藪にいる「ヤブボタル」も、ほとんどが本種又は本種を中心とした呼び名とみられる。

なお、隣接地域として調査を行った土山町山中では「シバボタル」を採録した。

オ その他

聞き取りから、「小さいホタルを捕ると貧乏になる」、「セツボタルは毒」、「セツボタルはヤマイボタルで病気になるので捕るな」といった諺・伝承等を採録した。



④ ヒメボタル (ホタル科)

ア 対象種

ヒメボタル

イ 生息情報

一部の集落 (はっきりとしない)

ウ 採録した呼び名

- ・ 小型であること コゴメボタル、コメボタル
- ・ 生息環境 ミズボータル
- ・ 標準和名等 ヒメボタル、ヒメホータル

エ 生息及び呼び名の状況

最も早い時期に出現し、点滅速度が他種に比べて早いという特徴を持つ小型の陸生ホタルである。

当時、ホタル類の認識としてはほとんどの人がゲンジボタルとヘイケボタルの大小2種であり、数集落でのみ本種の特徴を持つホタルの生息についての話がみられ、郡内の一部の地域に生息したようであるが、生息状況としてははっきりとしない。

本種の呼び名としては、「ヒメボタル」や「コメボタル」をはじめ計5種を採録した。

集落数としては限られるものの郡内全域から「ヒメボタル」を採録するとともに、一部の集落で「コメボタル」や「ミズボータル」等がみられた。

なお、「ヒメボタル」については生息情報との関係がはっきりとしないこともあり、当該集落において当時使われていた呼び名であったか疑問な点が残る。



※ 生息場所から名付けられたホタル類の呼び名について

当時、生息場所から名付けられたホタル類の呼び名は、多くの集落で種別を特定せずに使われていたようである。

- ・ 川辺にいる「カワボタル」は、数集落でのみゲンジボタルを指すという説明がみられた。
- ・ 水辺にいる「ミズボタル」は、数集落であるが水中との関係を示す説明がみられたことから、成虫としてのホタルと異なる幼虫等の視点での呼び名であった可能性が残る。
- ・ 藪にいる「ヤブボタル」は、特に説明は得られなかった。
- ・ 草藁にいる「クサボタル」は、一部の集落で他の昆虫又はヘビ類を指す場合がみられた。
- ・ 当時から明るい町であった神戸に例えた「カンベボタル」、また、神社の灯籠の灯火に例えたとみられる「ミヤボタル」は、ともにゲンジボタルの呼び名となっていた。
- ・ 田んぼにいる「タンボボタル」は、ヘイケボタルとして整理した。

(2) 水生昆虫

① ゲンゴロウ (コウチュウ目 ゲンゴロウ科)

ア 対象種 (同じ呼び名で呼ばれた種)

ナミゲンゴロウ、クロゲンゴロウ等
ガムシ (ガムシ科)

イ 生息情報

ほぼ全集落

ウ 採録した呼び名

- ・ 一般 (成虫) ゲンゴロー、ゲンゴロームシ、
ゲンジ
- ・ 幼虫 アマジ、アマミ、タバチ、ヒムシ、
ヤマベ、ヤマメ、ヤモメ



エ 生息及び呼び名の状況

身近な小川等の水辺でよく見かけられた大型の水生昆虫であり、当時は郡内のほぼ全集落に生息した。現在はガムシや小型のシマゲンゴロウ等は見かけられるが、ナミゲンゴロウはほとんど目にすることはない。

対象種としては、ナミゲンゴロウやクロゲンゴロウ等のゲンゴロウ類のほか、よく似たガムシがあげられる。

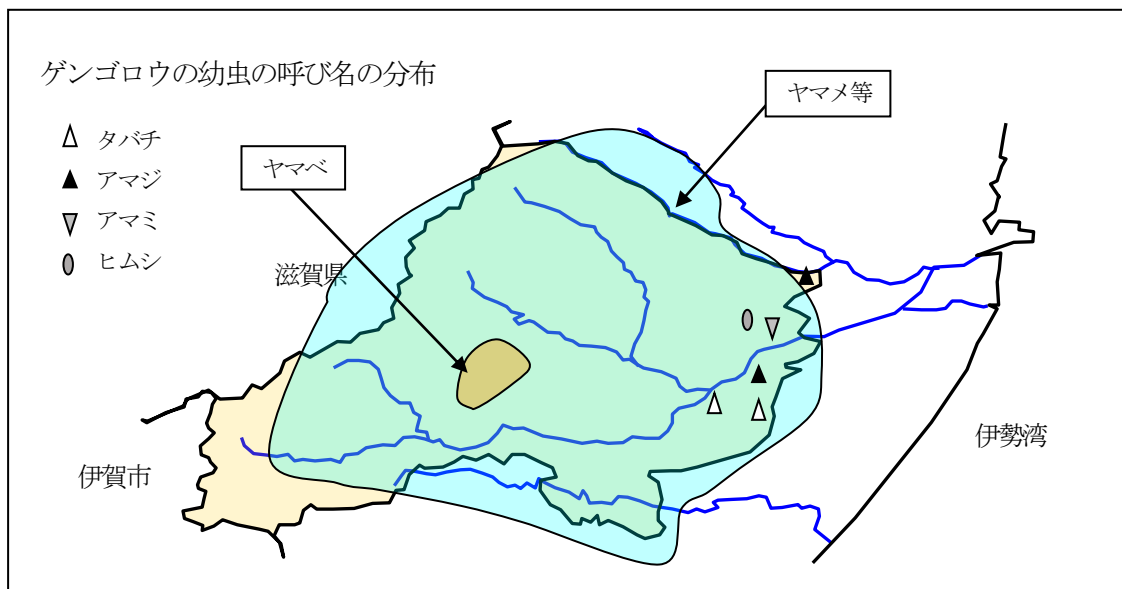
本種 (成虫) の呼び名としては、「ゲンゴロー」や「ゲンゴロームシ」をはじめ計3種を採録した。

郡内全域で一般的な和名でもある「ゲンゴロー」等と呼ばれたほか、上加太で「ゲンジ」がみられた。当時の子ども達には同様な場所で見かけられ、よく似た水生昆虫であるガムシと本種との区別はなく、併せて「ゲンゴロー」等と呼ばれていたようである。

幼虫の呼び名としては、「ヤマメ」や「タバチ」をはじめ計7種を採録した。

郡内のほぼ全域で「ヤマメ」又はそれに類する呼び名で呼ばれたほか、白川地区では「ヤマベ」、また一部の集落で「タバチ」や「ヒムシ」、「アマジ」等がみられた。

昔は、「みずた」と呼ばれた湿田が多くあり、そうした所で草取り等をしていた人が水生昆虫に強い痛みを伴って噛まれることが時折あり、それを多くの集落で「ヤマメに刺された」と言ったという。ほとんどの人が「ヤマメ」等はトンボ類の幼虫という認識であったが、形態等の聴き取り内容からゲンゴロウ・ガムシ類の幼虫であると考えられ、本種に整理をした。



② ミズスマシ類 (コウチュウ目 ミズスマシ科)

ア 対象種

ミズスマシ、コミズスマシ等

イ 生息情報

全集落

ウ 採録した呼び名

- ・ 回ること マイマイ、マイマイコン、マイマイコンベ、マイマイコンボ、マイマイムシ、ミズマワシ、ミズマワリ
- ・ 田植え時期 タウエムシ
- ・ 小型であること等 チンチンコンベ、チンチンマイマイ
- ・ 一般的な和名 (標準和名) ミズスマシ
- ・ その他 スイスイ、スイスイゴンボ、スイスイボ



エ 生息及び呼び名の状況

水面を素早く円状に回転しながら移動する小型の水生昆虫であり、郡内全集落に生息した。当時は身近な小川や水田等の水辺でよく見かけられたようであるが、現在は山間の清水の入るため池等を除きほとんど目にはしない。

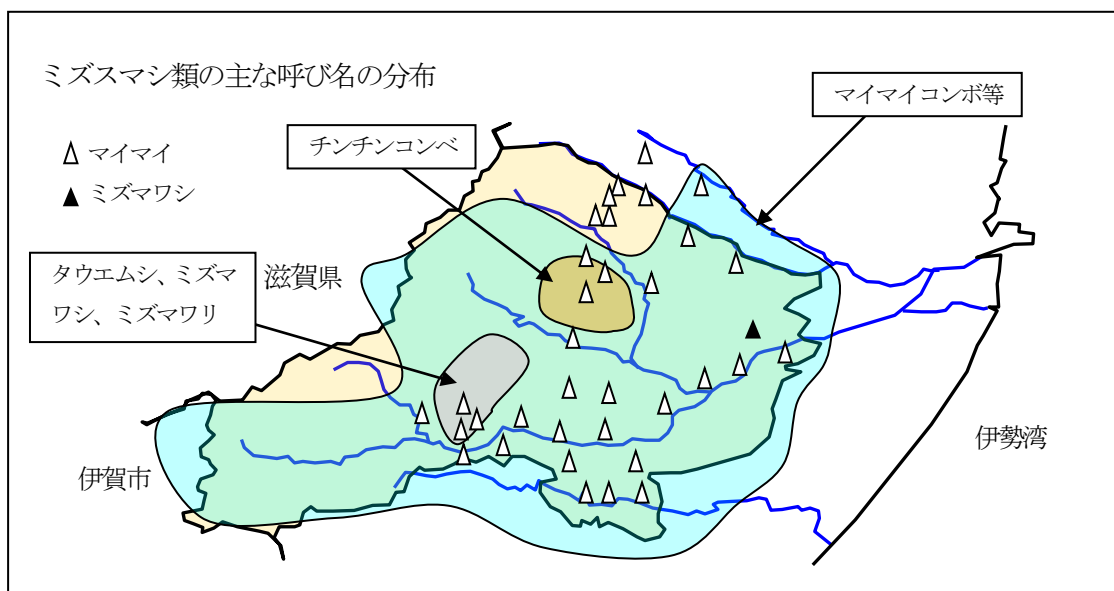
本類の呼び名としては、「マイマイコンボ」や「マイマイ」をはじめ計14種を採録した。

集落内でもいくつかの呼び方をされたようで、郡内全域で一般的な和名である「ミズスマシ」と呼ばれたほか、水面をぐるぐると回ることから椿地区を除き全域で「マイマイコンボ」等とも呼ばれた。また、加太地区等数地区を除き広い地域で「マイマイ」も使われ、同定不明として整理をした水面(近く)をすいすいと移動する昆虫の呼び名である「スイスイ」等も集落や人によっては本類の呼び名となっている場合がみられた。

地域的には、白川地区で「ミズマワシ」、「ミズマワリ」のほか、6月の田植え時期によく見かけられたことから「タウエムシ」とも呼ばれ、また、庄内地区では「チンチンコンベ」とも呼ばれた。

オ その他

聴き取りから、本類を見ると「まいまいこんぼ、どーこんぼ、くるくる回って目がもうて死んでくぞ」と言った、という話を採録した。



③ アメンボ類 (カメムシ目 アメンボ科)

ア 対象種

アメンボ、オオアメンボ、シマアメンボ等

イ 生息情報

全集落

ウ 採録した呼び名

- ・ 他種との混称 ガガンボ、ガガンボー、ガンガンボ、ガンガンボー
- ・ 一般的な和名 (標準和名) アメンボ
- ・ その他 アメリカ、アメリカサン、カワノカミサン、シオカラ、シオフリ、トビアメンボ、ピョンピョン、メンボー、スイスイ、スイスイゴンボ、スイスイボ



エ 生息及び呼び名の状況

水面上に浮かび、滑るように素早く移動するとともに、陸地ではよく飛び跳ねる水生昆虫である。小さな水たまりから、ため池、川の上流を含めほとんどすべての水域で当たり前のように見かけられ、現在も郡内全集落に生息する。

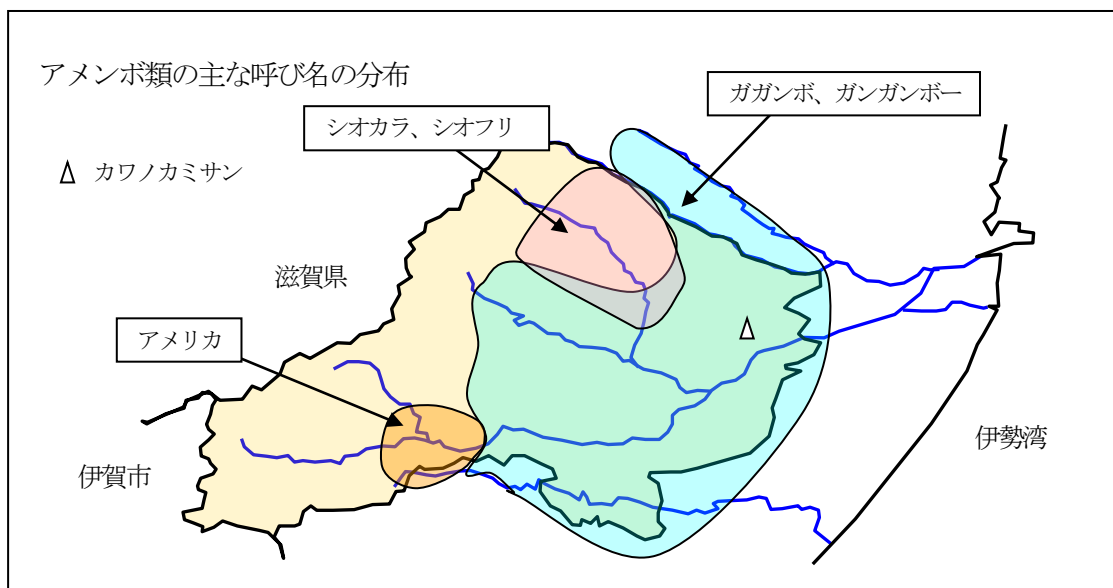
本類の呼び名としては、「ガンガンボー」や「シオカラ」をはじめ計16種を採録した。

郡内全域で一般的な和名である「アメンボ」と呼ばれたほか、蚊の一種であるガガンボに似た形状であることから広く「ガガンボ」又は「ガンガンボー」とも呼ばれた。

地域的には、坂下地区から関町地区にかけては「アメリカ」、庄内地区から深伊沢・椿地区では「シオカラ」又は「シオフリ」とも呼ばれるとともに、鈴鹿市高塚・加佐登では「カワノカミサン」がみられた。

加えて、同定不明として整理をした水面(近く)をすいすいと移動する昆虫の呼び名である「スイスイ」等も集落や人によっては本類の呼び名となっている場合がみられた。

なお、津市一身田町(調査対象外)で「アメリカ」と呼ばれていたようで、郡内の一部にみられたそれはより広域性を持った呼び名であった可能性がある。



④ タガメ (カメムシ目 コオイムシ科)

ア 対象種

タガメ

イ 生息情報

ほぼ全集落

ウ 採録した呼び名

- ・ 挟むこと ガイルバソミ、カエルトリ、カエルバサミ、ガエルバサミ、カエルハソミ、カエルバソミ、ガエルバソミ、オメコバサミ、オメサンバサミ、ガリバサミ、チンボツカミ、チンボバサミ、チンボバソミ、ハサミ、ハソミ、バシバソミ、ボボツカミ、ボボバソミ
- ・ 標準和名 タガメ
- ・ その他 オーガッパ、カッパ、ガニマサ、ガニマソ、ガニマタ、ガモジ



エ 生息及び呼び名の状況

大きな鎌状の前脚を使いカエルや小魚を捕食する大型の水生昆虫である。身近な小川や水田等の水辺でよく見かけられ、当時は郡内のほぼ全集落に生息したが、現在ではほとんど目にすることは少ない。

本種の呼び名としては、「ガモジ」や「ガエルバソミ」をはじめ計25種を採録した。

井田川地区から郡東部・北部地区の御幣川及び内部川流域の広い地域において「ガモジ」と呼ばれたほか、関町・神辺地区から白川・野登地区にかけては「カッパ」、国府地区から庄野地区にかけては「ガニマタ」等と呼ばれた。また、郡南部の昼生地区から高津瀬地区にかけてはカエル類を捕まえる姿から「ガエルバソミ」等が一部の集落で呼び名が重なるようにみられたほか、鈴鹿市甲斐町では「ガリバサミ」が使われた。

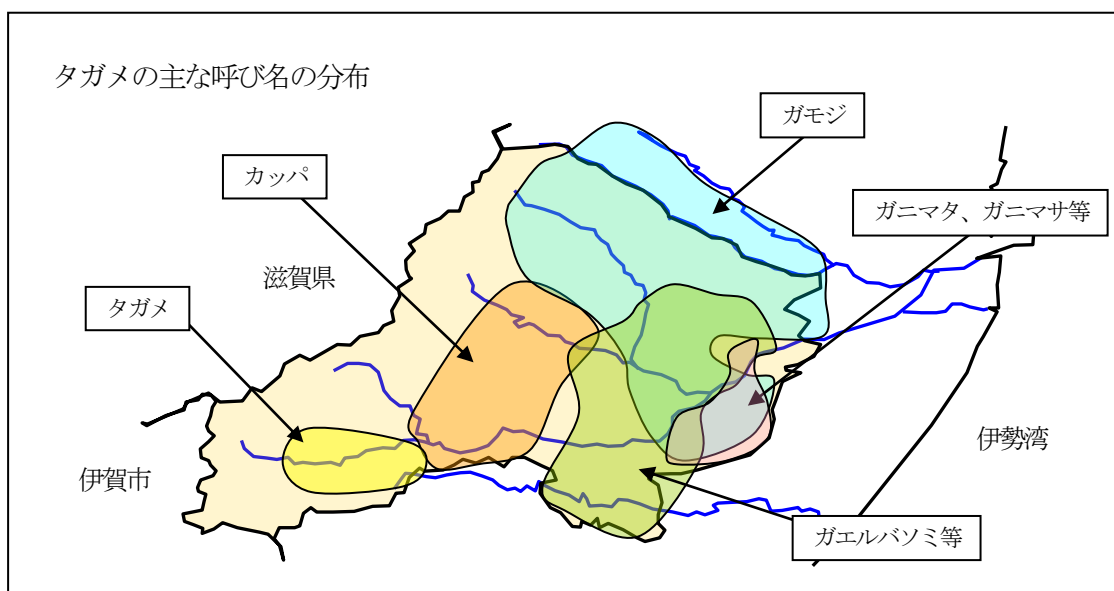
その他、変わった形態をした大型の昆虫であることから、男の子たちの間では俗語でもよく呼ばれたようである。

なお、隣接地域として調査を行った芸濃町林(川原)では「ガンパ」、塩浜磯津では「イソバソミ」を採録した。

オ その他

聞き取りから、次の捕獲方法を採録した。

- ・ タガメは、池で小さなカエルをエサに釣りをするとすぐにかかった。



※ タイコウチ (カメムシ目 タイコウチ科)

ア 対象種

タイコウチ

イ 採録した呼び名

- ・ 挟むこと ハサミ、ハソミ、チンボバサミ
- ・ その他 カッパ、ガーマンボー、スイッチ

ウ 呼び名の状況

調査対象とはしていないが、タガメの聴き取りで併せて、一部の集落から本種の呼び名として計6種を採録した。

タガメと同様な環境に生息する形状の似た水生昆虫であるが、子ども達の関心がより大型のタガメにあったようで、それに使われた呼び名や大きな前脚で挟むことからの「ハサミ」等のほかはあまりみられなかった。



⑤ ミズカマキリ (カメムシ目 タイコウチ科)

ア 対象種

ミズカマキリ

イ 生息情報

ほぼ全集落

ウ 採録した呼び名

- ・ 体の形状 アシナガ
- ・ 移動様態 スイスイ、スイスイゴンボ、スイスイボ、ミズカキ、ミズキリ

エ 生息及び呼び名の状況

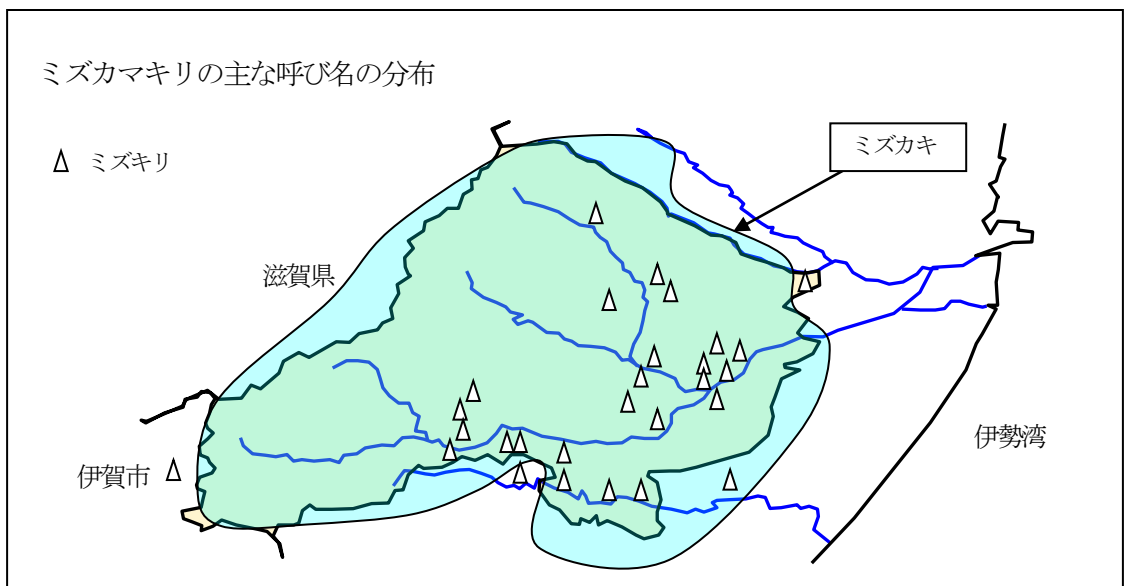
身近な小川や水田等で水面近くの水中进行する姿がよく見かけられた細長い体型の水生昆虫であり、当時は郡内のほぼ全集落に生息した。

本種の呼び名としては、「ミズカキ」や「ミズキリ」をはじめ計6種を採録した。

水を掻くように移動することから郡内のほぼ全域で「ミズカキ」と呼ばれるとともに、多くの集落で「ミズキリ」とも呼ばれた。

また、同定不明として整理をした水面(近く)をすいすいと移動する昆虫の呼び名である「スイスイ」等も集落や人によっては本種の呼び名となっている場合がみられた。

なお、隣接地域として調査を行った楠平尾町では「ガリンボ」を採録した。



⑥ その他

他の水生昆虫で呼び名を採録したのは次の通りである。

- 1) ミズムシ類 (カメムシ目 ミズムシ科)

ア 対象種

ミズムシ、コムズムシ等

イ 生息情報

はっきりとしない

ウ 採録した呼び名

- ・ 行動様態 カミツカミ、カミバサミ、フーセンムシ

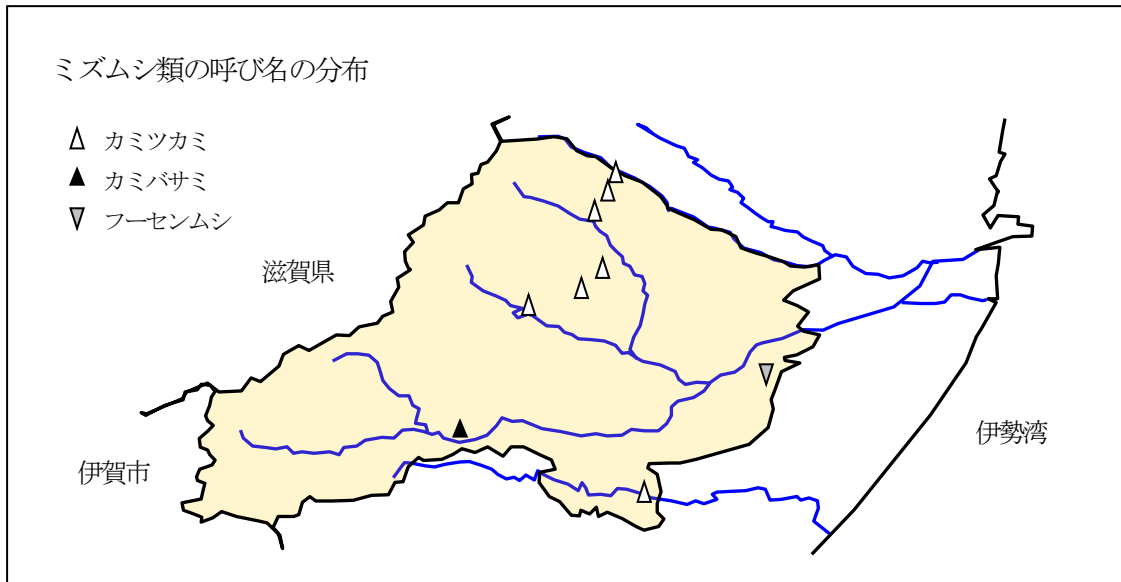
エ 生息及び呼び名の状況

身近な水辺で見かけられ、郡内のほぼ全集落で生息したとみられる小型の水生昆虫であるが、当時の子ども達にとり関心の対象ではなかったようで、一部の集落でのみ呼び名がみられた。

本類の呼び名としては、「カミツカミ」や「カミバサミ」をはじめ計3種を採録した。

庄内地区と椿地区では「カミツカミ」と呼ばれたほか、関町中心街で「カミバサミ」、鈴鹿市平田・弓削・岡田で「フーセンムシ」がみられた。

水槽の中に小さな紙片等を沈めると、底でそれを捕まえ水面近くまで運び離し、再び沈んだ紙片等を捕まえ運ぶようで、当時の子ども達はその繰り返しを見て楽しんだという。



- 2) 「スイスイ」等と呼ばれ水面又は水中をスイスイと移動するもの

ア 対象種 (同じ呼び名で呼ばれた種)

ミズスマシ類、アメンボ類、ミズカマキリ

イ 生息情報

多くの集落

ウ 採録した呼び名

- ・ 移動様態 スイスイ、スイスイゴンボ、スイスイボ

エ 呼び名の状況

水面又は水中をすいすいと移動することからの呼び名であり、郡内のほぼ全域で使われた。

対象種としては、ミズスマシ類又はアメンボ類、ミズカマキリがあげられる。

呼び名は単独或はそれらの総称であったようで、集落や人によってもその対象が異なっていたことから、「同定不明」として整理した。